

中央アジアの新石器化

—ウズベキスタン、カイナル・カマル遺跡調査(2015～2019年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授

The Neolithisation of Central Asia: New Data from Kaynar Kamar Rockshelter, Uzbekistan (2015-2019)

NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University Museum, The University of Tokyo, Japan

1. はじめに

2014年3月以降、筆者は「北ユーラシアの旧人・新人交替劇—ウズベキスタン旧石器遺跡調査」という演題で本報告会にて発表を重ねてきた。アフリカで誕生した解剖学的新人(ホモ・サピエンス)が北ユーラシアにどのように拡散し、既に定着していたネアンデルタール人やデニソワ人ら旧人と交替したのかについての現地調査を報告したものである。調査は2012年から2019年まで毎年、ウズベキスタンで実施してきた。現在中断しているのは、2020年に始まったコロナ禍による。

旧人・新人交替劇にかかわる中期旧石器時代を中心に複数の遺跡を踏査、発掘してきたわけであるが、その中の一つ、カイナル・カマル岩陰遺跡(図1)では、実のところ、交替劇理解に直接、貢献する知見は得ら

れなかった。地表下8mまで掘りさげたが、居住痕跡の主体は完新世のものだったのである。幅が70mほどもある巨大岩陰であるから、発掘地点によって今後、新たな発見がある可能性は否定できないものの、我々が設けた三つのトレンチでは交替劇関連の考古学的堆積は見つからなかった。しかしながら、落胆したわけではない。カイナル・カマル岩陰の堆積は、中央アジア西部に初期農耕牧畜社会、つまり新石器時代文化がどのように拡散し定着したかを探るうえで絶好の考古学的証拠を含んでいたからである。新石器時代の開始と発展は、旧人・新人交替劇とならんで筆者が関心をよせている二大テーマの一つであり、この報告会でも、メソポタミアやコーカサス地方を中心に複数遺跡について調査成果を報告してきた。

今回の報告では、カイナル・カマル岩陰が中央アジアで新石器時代がどのように始まったかを探るうえで



図1 カイナル・カマル岩陰の位置

きわめて重要な遺跡であることを述べる。

2. 中央アジア西部の新石器化

中央アジアの新石器時代の開始を告げる遺跡として最も著名なのは、1950年代に最初の発掘がおこなわれたジェイトゥーン遺跡であろう。イランとの国境にあるコペト・ダー山脈のトルクメニスタン側にあるテル(テペ)である。西アジア、特にイラン高原と酷似する土器新石器時代文化を出土したことで知られる。1990年代の再調査と年代測定によって、現在では前7千年紀末から前6千年紀初頭に位置づけられている。前6千年前後と言うのは、いわゆる8.2 ka イベントとよばれる地球規模の短期的かつ急激な気候寒冷乾燥化が生じた時期であり、西アジア周辺地域で社会再編が起きたことが判明している。カスピ海の西側、南コーカサス地方において西アジアから新石器文化が到来したのも同じ頃である。おそらく無関係ではないのだろう。

ジェイトゥーン遺跡の文化は明らかにイラン高原からの浸み出しのようなものだが、そこから先はどのようなのか。中央アジア西部でこれまで知られている他の新石器時代文化としては、カザフスタンにまで拡がる北のステップのケルテミナル文化と、タジキスタンを中心とした東方山麓地帯に分布するヒッサール文化がある。いずれも旧ソビエト時代に提唱されたもので長らく年代が十分には定められていなかったが、2000年代になって、ケルテミナル文化が前6千年紀初めから始まったこと、少なくとも牧畜がおこなわれていたことが判明した。ジェイトゥーン一帯で食料生産経済が始まって以降、それがすみやかに北にも拡散し、漁労に重点をおくなど独自の生業経済を発展させつつ成立した文化であつたらしい。

もう一つ、ヒッサール文化については開始時期が判然としていない。この文化はタジキスタンの南山麓部で知られているもので、土器の利用はほとんどなく礫石器と押圧剥離細石刃の製作で特徴付けられている。旧ソビエト時代に、穀物栽培の証拠は乏しいが牧畜がおこなわれていたらしい、前6千年紀にまでさかのぼるのではないかと推察が示されていたが再分析が必要である。

この点、ヒッサール文化分布域の北のキルギス共和国、フェルガナ盆地にあるオビシール岩陰の再調査によって、そこに前6千年紀前半に家畜ヒツジが持ち込まれていたことが2021年になって明らかになったこ



図2 カイナル・カマル岩陰遠景。右手前に流れるのはタンゲ・サルト支流

とが興味深い。ジェイトゥーン遺跡のあるコペト・ダー北麓からは1000 km ほど離れた地域であるが、最初期の食料生産経済が北東方面にもすみやかに到達していたことを示すものである。カイナル・カマル岩陰は南東山岳地帯への拡散について新たな光をあてるものだと考える。細かく言えば、ヒッサール文化分布域の西隣に位置しているから、この文化のあり方の理解についても貢献するはずである。

3. カイナル・カマル岩陰の発掘調査

カイナル・カマル岩陰は、ウズベキスタン南東部、マチャイ渓谷に位置する(図2)。仏教遺跡が多数あることで著名なテルメズ市周辺のステップ地帯からヒマラヤ天山山脈への入口とも言える。標高は1300 m から2000 m 超、東の分水嶺を超えればタジキスタンである。この渓谷は1930年代に発掘され中央アジア初のネアンデルタール人化石を産出したテシク・タシュ洞窟があることで知られていたから、旧人・新人交替劇の研究を目的とした筆者らが類似の遺跡がないかどうか2015年以降、細かな踏査をおこなった。その結果、見つかった遺跡の一つがカイナル・カマル岩陰というわけである。

この渓谷にはマチャイ村一帯のみに若干の平地がある。カイナル・カマル岩陰はその西端、最下流部に位置している。タンゲ・サルトと呼ばれる支流水源に面した岩陰遺跡である。標高は約1350 m、幅は約70 m、奥行きは最大で約5 m ある。A、B、Cの三つのトレンチを発掘した。発掘は2015年から2019年まで毎年おこない、Aは地表下約3 m、Bは5 m、Cは8 m 以下まで掘り進めたがいずれも岩盤にはいたらなかった(図3)。しかしながら、最も深いトレンチCにおいて、



図3 カイナル・カマル岩陰トレンチCの発掘

当地に新石器時代文化がどのように到来したかを語るうえで十分な考古学的証拠が得られた。

8mの堆積は大きく6つの地層に区分できた。最も深い第6層はほとんど無遺物であった。一方、第5層より上は炉跡などとともに石器、骨角器等の遺物が出土した。それら居住痕跡が一気に増したのは第3層以降である(図4)。土器が出土したのは第2層以降のみであった。全部で40点ほど放射性炭素年代測定をおこなったところ、第5層は前9千年紀、第4層は前8千年紀、第3層は前6千年紀前半、そして第2層は前4千年紀に位置づけられた。第1層は前2千年紀以降の歴史時代である。

最も興味深いのは第3層である。その年代は中央アジア西部に新石器文化が広がった時期にあたるからである。実際、カイナル・カマル岩陰の出土物を調べると、家畜と思われるヒツジ・ヤギの骨が一気に増加し、さらには、それまでいなかったウシの骨が見つかるようになる時期であったことがわかった。穀物栽培の証拠がはっきりしなかったのは山岳地帯であるからやむを得ないところであるが、家畜飼育がなされていた可



図4 カイナル・カマル岩陰第3層の炉跡

能性が高いことが判明したのは大きな成果である。また、出土した石器や骨角器の特徴も西アジア新石器文化の特徴を示すものであったから、やはり、この頃、食料生産経済が到来したのだと考える。

ただし、第3層の遺物群がヒッサール文化に属するのかどうかはよくわからない。地理的には極めて近いのだが、ヒッサール文化の特徴とされる礫石器はほとんど見当たらなかった。ではケルテミナル文化なのかと言えば、打製石器の特徴が異なっている。現状では、細かな文化的類縁関係が定まっていない。そもそもヒッサール文化に礫石器が多いことは遺跡ごとの原石環境に由来しているのであって当該文化全体を代表している特徴ではないのではないかとの見方もある。また、カイナル・カマル岩陰の文化アッセンブリッジが平地集落から放牧のために山岳地帯に出向いた集団が残したものだとすれば、平地集落の物質文化がどのようなものだったかも検討せねばならない。課題は多いが、この遺跡の調査はタジキスタン国境近くにまで前6千年紀前半に新石器文化が広がっていたことを初めて示す遺跡となった。

4. おわりに

西アジア型農耕牧畜の拡散についてはヨーロッパ方面への拡散研究の蓄積が圧倒的なのに対し、北方や東方への拡散については不明な点が多いままであった。対象地域が旧ソビエト圏諸国、あるいは南アジア周辺の政情不安定国にまたがっているため西側研究者の先端的研究が導入されていなかったことによるところが大きい。

カイナル・カマル岩陰の研究は、旧人・新人交替劇を調べるために始めたものだが、新石器文化拡散の研究にとっても思いがけず貢献することになりつつある。

ヒッサール文化や周辺文化の性質解明というローカルな課題だけでなく、筆者がこれまですすめてきたコーカサスや北メソポタミア、ザグロス山脈の新石器化データとあわせてよりグローバルな視点にもとづいた解釈にもとりくんでいきたいと考えている。

この報告は文部科学省科学研究費補助金新学術領域『パレオアジア文化史学－アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』成果取りまとめ(課題番号 21H00455、研究代表者：西秋良宏)の成果の一部である。

■参考文献

- ・ Nishiaki, Y. 2021 Dispersals of pressure debitage technology to Central and Southwest Asia. In M. Lebeau (ed.), *Identity, Diversity & Contact: From the Southern Balkans to Xinjiang, from the Upper Palaeolithic to Alexander*, 9-17. Turnhout, Breplos Publishers.
- ・ Nishiaki, Y., O. Aripdjanov, S. Arai, C. Akashi, H. Nakata, B. Sayfullayev, O. Engeshed and R. Soleimanov 2022 Neolithization during the 6th millennium BC in western Central Asia: New evidence from Kaynar Kamar Rockshelter, Hissar Mountains, Southeast Uzbekistan. *Archaeological Research in Asia*.
- ・ 西秋良宏・O. アリプジャノフ 2021「北ユーラシアの旧人・新人交替劇－ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2012～2019年)－」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』62-65頁 日本西アジア考古学会。